黄昏れ時より紅き赤

岸ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黄昏れ時より紅き赤

【Ｎコード】
Ｎ０７６２Ｈ

【作者名】
岸ちゃん

【あらすじ】
現在日本には特異な病気が蔓延していた。その病名は多重性妄想具現化病、しかし一般的には憑かれ人と呼ばれ迫害されていた。妖怪に憑かれた人として。

プロローグ（前書き）

古本屋で面白い本を見つけたのでその設定を真似ました。解る人もいるとは思いますが内容は全然違うのであしからず。

プロローグ

白い……白い廊下がある。壁も床も天井までもがまるで汚れを嫌う様に真っ白だ。その真っ白な廊下に少年がいる。

そしてその少年の目の前をたくさんの行き交う人々がいる。皆同じ目をしていた。

無機質な蛍光灯に照らされ白く太い入り組んだ通路をそれぞれの目的地に向かうその姿はまるで蟻の巣の中光景の様に見える。

だがしかし、その光景には全く現実味が無い。まるで人の形をした趣味の悪い人形のようだった。人々は一人も喋らず、そして皆揃ってガラス玉のような意思の感じる事が出来ない伽藍洞な目をしていたからだ。

ふと横の壁にある鏡の様に磨かれたネームプレートを見る。そこには同じ様にガラス玉の様な目をした少年がうっすらと写っていた。歳は十代後半、髪の毛は適当に整えられ少しつり目気味の少年だ。それが己の姿であることもまるで現実味が無かった。

写りこんだ自分から目を逸らし自分の目的地に向かう。自分は考える必要も無い。ここでは考える事は意味が無い。

通り過ぎた壁には［特殊災害対策安全保持事務局管理課　伽藍管理室］と書かれていた。

白い通路の端まで来た時ふと足を止めた。窓があり外は見える。どこにでも在るような街が見えた。しかし、自分は何故足を止めたのか自分でも解らない。本来ならこのまま右に曲ってそのまま三番目の部屋三十秒後に入らなくてはならない。

頭にズキリと小さな痛みが走った。窓の向こう沈みゆく太陽を見る。

その方角に何が有るのか少年は考える事は出来なかった。しかし、じっと少年の視線は一点に向けられそのまま動か無かった。

「何年間、そう五年間だったかのぉ」

背後から、突然声が聞こえた。
少年がゆっくり振り向くと、小さな少女が立っていた。少年と同じ白い服を着、顔も美人では無いが不細工でも無いという特徴の無い顔達だった。
さっきより強い痛みが走る。
目の前の少女を少年は知らない。だが、知っている。だがどこで会ったのかは思い出せない。思い出したいとも思わなかった。
少女は少年を見上げながら、ニコリと笑った。
「五年もの間ずっとそうしていたのか？　何も考えずに、何も欲さずに」
細い指が少年の頬を撫でた。
「なんともったいない。お前の心はとても強かったのに……だが安心しろお主はすぐに思い出すお主の心を」
ダンッ、と大きな音が二人の隣で響いた。
「お前達、何をしている！」
特殊部隊が付ける様なゴーグルをかけた人物が、歩み寄ってくる。黒いコートを着込み誰かわからないが大柄な身体から男だという事だけはわかった。チラリッと私達を見て今度は厳しい声で
「お前は何者だ！」
私ではなく少女に向かって怒鳴った。
「特殊災害対策事務局の監視兼管理者か。このフロア担当なのかのう？」
「質問しているのはこちらだ質問に答えろ！答えないなら」
男の後ろからさらに大きな人影が現れた。
「カッカッカ、お主の憑き物はそんな形か。都合がいいのぅ」
「何だと？」
黒コートは訝しがりながら尋ねた。
しかし、少女は無視し少年の方を向いた。
「お主は今何がしたい？　何が欲しい？　どこに行きたい？　もうお前の好きなようにしていいのだ。そしてお前の心の輝きを見せて

くれ！」
少年のガラス玉の瞳に揺らぎが生じた。少女の言っている意味はよくわからないが何かが自分の中に苛立ちを感じた。
「お前、何者だ？」
黒コートは少し恐れながらも近づいた。
ピキッ
「な、何だ？」
少女の背中にひびがはいった。
メキメキッ……ボコッ
少女がまるで卵の殻の様に割れて中からどう見ても少女以上の大きさをした巨人が出て来た。
ピクリッと黒コートが硬直する。
「その姿！　俺の、お前はまさか写り神か？！」
しかし、またも黒コートを無視し巨人は少年の方を向いた。
「お主の魂の輝きは実に素晴らしい。その輝きをもっとわしに見してくれ」
異形巨人がさらに変形していった。
「願い想うは人の常。そして聞き叶えるが神の常」
いくつもの生き物をごちゃまぜにした様な姿で元少女だった者が高らかに言った。
「余計な事するな」
少年はポツリと呟いた。

プロローグ（後書き）

つづく

先生と私（前書き）

最初は主に説明です。

先生と私

私の名前は三石今日子という。憑かれ人でもある。

憑かれ人とは何か？

それは私にもよく分からない。約十年前に突然発生し瞬く間に日本中に広まった病気？　だ。症状は極めて特殊で憑かれ人はその名の通り何かが取り憑く。そして己に憑いた何か分からない物を自在に呼び出し使役する事ができたり、自身が特殊な力を得る事が出来る。無論、病気と言われているからには代償もある。

症状がある程度進行すると憑き物だけがこの世に残り、憑かれ人本人は消えてしまう。　これを一般では入れ代わりと言われる。

そして入れ代わってしまった人間は二度と戻る事無く、治療方法はただ一つ憑き物を破壊する事だけである。

しかし厄介な事にこれにも問題がある。憑き物を破壊してしまうと憑かれ人の人格も破壊されてしまう。そして自分では何も考える事ができなくなり周りの指示に従うしか出来ない人形になってしまう。

彼等をからっぽの人間として伽藍と呼ばれ、憑き物が破壊される事を伽藍に成ると言われる。

話を戻すが私は旅に出ている。住んでいた所で自分が憑かれ人とばれて特災に隔離施設に入れられそうになり自分の街にいられなくなったからだ。

特災とは、確か正式には特殊災害対策安全保持事務局と長ったらしい対憑かれ人用の警察みたいな物だ。そして、憑かれ人に対して非人道的な実験をしているので憑かれ人達の中ではかなり有名でもある。

少し前までは一人旅だったが今は先生といる。

先生は憑かれ人では無い。そして学校の先生と言う訳でも無い。私が勝手に先生と呼んでいるだけだ。先生もまんざらでも無いよう

だったし私も気に入っている。
先生は大学を去年、卒業したらしい。時期が悪く就職もせずに全国をぶらぶらして見聞を深めているらしく初めて会ったのは駅前で段ボールで野宿している所であった。
先生は初めて出会った時、
「君は憑かれ人か？」
と聞いてきた。
私は驚いた。先生の事を特災の局員と勘違いしたからだ。よく考えればホームレスの格好なんて有り得ない事なのだかその時、バイトも見付からず腹を減らしていた為に私は思考力が低下していた。その後、多少ごたごたがあったものの誤解も解け私は食事に誘われた。段ボールハウスで手料理の味噌汁と白米が食べられるとは思わなかった。先生いわく日本の心らしい。
それから、私はずっと先生と一緒に旅をしている。先生は私が憑かれ人なのを知っている。それでも先生はそんな事は気にしない。むしろ興味津々だった。
先生は何でも知っていると言っていいほど物知りだ。
先生一人密林のジャングルに放り出されても平気で生き残れそうな程、サバイバル技術もあった。
しかし、変人でもあった。まあそれは憑かれ人を傍に置いている時点で分かっていたつもりだった。
「おい、今日子君！　そろそろ起きなさい」
目をつぶり思考にふけていた頭に現実が戻って来た。
「おはようございます。先生、早起きですね」
私は寝袋からモゾモゾと這い出した。先生は腕立て伏せをしていた。
「朝から熱心ですね。朝の鍛練ですか？　先生」
「筋肉はすぐに劣ろえからな、それに朝、身体を完全に起こす為でもある」
私は立ち上がり欠伸をし周りを見渡した。美しい森と湖？（池）

が見える。こうやってフラフラ全国を巡ってみると日本は本当に森や林が多い。都会に住んで余り旅行に行かない私には少し意外だった。

「今日子君、顔を洗ったら魚でもを突きに行こうか」

起き上がり汗を拭きながら聞いて来た。

「二人で魚突いても仕方ないでしょ。私は山に行て山菜でも取ってきますよ」

先生に毒され私もサバイバル少女になってしまった。

「気をつけて行きなさい」

私は湖で顔を洗い歯磨きをしてから準備を整え山に向かった。

……

日本の山に人に襲い掛かるような獣は殆どいない。しかし毒を持つ虫、植物などはしっかりと存在する。

気をつけなければならない。私は注意深く山道を歩いた。

この辺りは特に何もないな、先生との論戦の為に少し考え事をするか。

憑かれ人は主に十歳から二十五歳の少年から青年ぐらいによく発現する。男女の比率は５８対４２やや男が多い。しかしその差は微量であるため憑かれ人と男女は関係ないと予想されている。そもそも憑かれ人は全て写り神と呼ばれる存在によって発現する。写り神の正式な名称な無く、色々な物の姿を写す事から写り神と呼ばれている。あっ、なんだ、変な茸を発見した。派手な色でも無いし一応とっとこう。

写り神とは何か？　それは先生にも、そしてもちろん見た事のある私にも解らない。しかし憑かれ人について先生は幾つかの推論を立てた。

1、憑かれ人は心の具現化である。何故子供に発現しやすいか？

それは自己のアイデンティティを固定仕切れない曖昧で多感的な状態にあるからで、言わば非常に夢見がちな歳である為という事である。そして伽藍に成るというのは自分の自我＝憑き物という式が成

り立つ為、憑き物が破壊されるという事は自我の崩壊と同義であるといえる。
2、写り神とは妖怪の塊であり、憑かれ人とはその一部を無理矢理植え付けられた物である。それなら何故伽藍に成るのかそれは妖怪が精神体、所謂幽霊の様な存在で魂と結合により仮定1と同じ状況になると言える。
「シッ」
私は持っていた拳大の石を微かに音が聞こえた方に投げ付けた。
「ギャン！！」
あ、野犬かな？　野犬は余り美味しくないんだが。
「誰だ！！」
……飼い主がいたようだ。思ったより人里に近付き過ぎた様だった。
「すみません。野犬かと思いまして」
私は仕方なく頭を下げながら声の方に向かった。
「む、女か」
飼い主さんは私を見て驚いている。犬は頭を潰され脳漿を垂れ流して悶死している。私はガリガリと言うほどでは無いがどちらかと言うと細身だ。細腕で犬の頭が割れる程の速度で石を投げたのに驚いているようだ。
「あの～、すみません」
何も言わずに黙っている飼い主に埒があかず仕方なく私から話しかけた。
「あ、ああ、お前一人だけか？　連れはどうしたんだ？　こんな山奥に何をしている？　この辺りは一人でいると危ないぞ。迷ったのなら下まで送るが」
飼い主さんはどうやら登山者のようだった。
「あ、すみません。大丈夫です。知り合いが近くにいますので。犬の事すみません。危ない獣かと思いまして」
私は飼い主さんの質問に答え謝った。

「むぅ、……まあいい今度からちゃんと気をつけろよ」
優しい飼い主はすぐに私を許してくれた。何か急いでいる様でもあった。
「本当にすみません。お急ぎの様でしたら、私がその犬を埋葬したいのですが」
私はすまなそうに話し掛けた。
「あ、ああ、そうだな、このままにするのはこいつが可哀相だしな。俺は急いでるんだ。すまないがこの辺りに埋めてやってくれ」
「はい。私が悪いですから」
私が返事をすると飼い主はさっさと山の中でに消えてしまった。
「えらく簡単に許してくれたな。もう少しごねるかと思ったんだけど」
私はボソッと呟くとビニールを取り出し犬を丁寧に包み籠の中に入れた。
ラッキーだ。飼い犬は良いもの食ってるからたいていはなかなかいける味だ。
その後山菜等をしばらく捕った。
ふと気付くと籠がいっぱいになっていた。
「ふむ、まあこんなもんか」
私は満足気にキャンプ地に戻った。

先生と私（後書き）

つづく

一話、ウスツキ、雑魚を虐める

深夜……公園にて

「アハハハハハハ！！」

夜遅くに一人の眼鏡の少し痩せた少年が狂った様に笑っている。

いや、一人では無い、周りには柄は悪そうだか体格のいい少年達が数人倒れている。

「こんなもんすかぁ？　僕の事ゴミ扱いしてたのにぃ。こんだけなんですかぁ？　ねぇ！」

ドスッ！

笑っていた少年が倒れた少年の腹を蹴飛ばした。倒れた少年は完全に気絶しているのかなんの反応しない。

「ねえ、聞いてるんですかぁ？！　ねえ！　ねえ！ねえ！！」

ドスッ！　ドスッ！　ドスッ！

少年は声に合わせて蹴る蹴る蹴る。

「僕がゴミならそのゴミ以下のお前は何なんだぁ？　ゴミ以下の存在なのかぁ？　返事をしろよ！」

しかし、倒れた少年はなんの反対もしない。腹を蹴られ死んでしまったのかもしれない。

「クッ、アハハハハハ！！」

死んでしまったかも知れない少年を見てまた眼鏡の少年は大声で笑い始めた。

……ジャリッ

「だ、誰だ！？」

元虐められッ子だった眼鏡の少年は少しの音に過敏に反応した。

……ジャリッ……ジャリッ……ジャリッ

砂を踏み歩く音が聞こえるが深夜の公園、ライトの無い所は全く見えない。

「誰だと聞いているんだ！」

眼鏡の少年が叫んだ瞬間、少年の後ろに最初からいたように巨大な人影が現れた。
「それがお前の憑き物か。ビビりでカスなお前にお似合いだな」
声がした暗闇から黒ずくめの人が出て来て言った。
無骨なゴーグルをし全身を黒いコート、黒い皮手袋、黒いズボンで包み込み、肌が露出しているのは口元だけという徹底した黒ずくめだった。
その異様な姿に眼鏡の少年は少し怯んだが、声から相手が女である事と自分が人を越えた存在になった事を思い出し余裕を取り戻し不敵に笑った。
「僕の鬼を見ても脅かないとは、君は随分肝が据わっているねぇ。もしかして君も憑かれ人ですか？　僕の鬼をカス扱いとは言ってくれますね。あなたはさぞや強い憑かれ人なんでしょうねぇ」
「……」
黒ずくめの女は何も言わずに肩に小さな少女を出した。まるでお人形のようなとても綺麗でかわいらしい少女だった。
「何だい、それは？　それが君の憑き物かい？　そんな小さくて弱そうなのが僕の鬼以上なのかい？　フッ、クックック……僕を馬鹿にしているのか！！」
眼鏡の少年は鬼をけしかけた。鬼の身長は約二・五メートル。外見は角が有るものの案外、人に似ていた。しかし、筋骨隆々とした腕の太さは黒ずくめの女の腕の四倍近くあった。
「ウガアアアアア！！」
巨体だが素早く一瞬で黒ずくめの女の前に現れ腕を振り落とした。
ガッ
「遅いな」
黒ずくめの女は殴り掛かってきた鬼の腕を軽々掴みながら蔑む様に呟いた。
「それに腕力も人とあまり変わらないじゃないか。不良のバカガキばかりとはいえよく三人相手によく勝てたな」

「ば、馬鹿な僕の鬼が。ええい！　何をしている！　早く振り払え！」
眼鏡の少年の声を聞き思わずぼうけていた鬼が腕を振り回そうとした。しかし掴まれた腕はびくともしない。
「ど、どうなっている！ありえない。お前は怪力女なのか？　ハッ！　そうかお前自身が憑き物なのか！　あの小さいのが本体だ！」
黒ずくめは黙って懐から拳銃を取り出した。そしてそれを鬼の額に向けた。
「ハ、ハハ、無駄だぞ。そいつは鉄バットで殴られても平気だったんだからな。そんなもの」
少年は引き攣りながらも自分は余裕である様に振る舞う。拳銃など見た事ないが撃ち出すのは所詮は鉄の弾だ。鉄バットでもびくともしない自分の鬼には通用しないと考えた。それは自分の身につけた力の弱小さを認め無いように。
「ほほう、鉄バットが平気なのか。やけに力が弱いと思ったら黄鬼の類か。黄鬼は力も無く無いけど体硬いからな。なら」
いつの間にか現れた小さな少女が拳銃に触れた。すると拳銃が薄く光を発した。
ダアァァァンッ！！
およそ拳銃がたてる音では無くまるで対戦車ライフルのような轟音と共に拳銃から弾丸が発射された。
そして、鬼の顔面に直撃し頭が弾かれ、そして背中から派手にドタッと倒れた。
しかし、鬼は弾かれ吹き飛ばされたもののまだ致命的では無く、すぐに頭を振りながら立ち上がった。
「どうだい、僕の鬼は！　そんな程度の攻撃は効かないんだよ！」
鬼は少年の言葉とはうらはらにかなりダメージを受けていたが、まだふらつきながらも立ち上がり戦意は衰えていない。
「ほう、凄いじゃないか。全然本気じゃないけど、今のくらったら、防弾チョッキ着てても人間なら衝撃だけで内臓ぐちゃぐちゃだった

のにな」
　女は少し関心しながら呟いた。
「よし、特別に私が何者か教えてやろう。私は特殊災害対策事務局所属のウスツキだ。ちなみにウスツキはコードネームみたいな物だ。そしてお前はカスから少し頑丈なカスに昇格だ。おめでとう」
　女……ウスツキは拍手しながら少年を褒めた。
「クソッなめやがって。ハハッ！　だが俺はお前の力はだいたい読めた。……お前の力は物を強化するのだろう？　そのちっこいのは所謂、……座敷童の類だろう？」
　少年はウスツキに尋ねた。これまで、ウスツキは人の何倍も有る鬼の一撃を受け止め、小さな拳銃を大砲並の威力にした。そこから推測するとそれしか思い付かなかった。
「フフ……」
　ウスツキは薄く笑った。
「ち、違うのか！？」
　もし違うなら予想がつかない。
「ああ、いや、その通りだ。私の力は祝福強化。あらゆる物を祝福を与え強化する。…だがな、私の力がわかった所でどうするんだ？　単純な力押ししか出来ない憑かれ人が力で押し負かされてしまった今さらどうする？　えぇ！　能力が読めたぁ？　だからどうした。能力が読めようと読めまいとお前が負ける事には違いないだろう？」
　ウスツキは笑いながら断言した。
「ククク、ハハハ、何を言ってるんだい？　君は強化した拳銃で僕の鬼を撃った。でも僕の鬼は平気だった。これはつまり強化した腕力でも僕の鬼は倒せないということじゃないかい？　それとも君の拳は弾丸以上かい？」
　余裕を取り戻し少年は笑った。
　しかし、それを見てウスツキはため息をはいた。
「あのな、お前……馬鹿か？　さっき全然本気じゃないって言っただろ。それに仮に本気だとしてもそれは私が他に何も持って無かっ

たの話だろ。おまけにお前本人を狙えば一瞬じゃないか」
　そういいながらも腰から丸い物を取り出した。
「これは手榴弾。こいつ強化したら半径十メートル以上は軽く消し飛ぶ。ここで爆発させるか？」
　ウスツキはピンを抜いた。
「馬鹿！　やめろ！　そんなもん使ったら自分も」
「身体強化したら簡単に逃げられる。まあお前には使わないけどな。勿体ないから」
　そう言いピンを戻し手榴弾を腰に片付けた。
「やっぱこれだろ。弾切れにならないし」
　ウスツキは背中から一振りの刀を取り出した。
「私の能力は強化。使い様ではどんな敵にも対応出来る万能な力。例えば自分の体に使えば身体能力は倍増し、拳銃に使えば大砲並に、そして刀に使えば切れぬ物無しの名刀になる」
　ウスツキは抜き身の刀を構えた。
「お前みたいな硬い奴はこれが一番効くからな。それに鬼退治は昔から刀じゃないと」
　ウスツキは元々、右手に刀を持ち、左手は拳銃という中近戦型万能スタイルだった。
　本来、刀も拳銃も片手では扱えない。
　刀は案外重く片手で扱うと逆に振りまわされ、拳銃はそのものは軽いが反動でまともに照準を合わせる事ができない。
　しかし、己を強化することでウスツキはその二つをほぼ完璧に使いこなせる様になっている。
「刀だって？　いつの時代だよ。そんな物で」
ドスッ
　銃弾も通じないはずの鬼の肩を一差した。
「ググゥ」
　鬼が痛みの為唸り声をあげた。
「馬鹿な、なぜだ？　そんな時代遅れな武器に」

少年は愕然とした。
「やっぱりお前、馬鹿だろ。馬鹿は死ね！」
肩から刀を抜き構えた。
「う、うわぁ。お、おい。ちょっと、ちょっと待ってくれよ。お前も憑かれ人だろ。仲間だろ。何でこんな事するんだ」
ウスツキは呆れた顔をした。そして、ニッコリ笑い。
「シネ。蛆虫が！」
刀を振り上げた。
「ひいぃ、い、行けよ。ほら、速く」
少年は鬼を前に出し囮に逃げようとした。元々の臆病な性格とウスツキという精神的圧迫から冷静な判断が出来なくなっていた。
「グ、グゥゥ」
鬼は嫌々ながらも宿主に従った。
「フンッ。死ねクズが！」
ウスツキが切り付けるとあれだけ硬かった鬼がたやすく切れ、その右の腕を切り落とした。
「ガアァァァァ！！」
「アガギグググゥ！！」
少年と鬼の悲鳴が綺麗に重なった。
自分に憑かれている憑き物が傷つけば宿主にもそのダメージが伝わる。黄鬼という防御力が強い憑き物だった為、少年は憑き物が傷ついたらどうなるのか知らなかった。
その結果、少年は痛みで完全に動けなくなった。
その様子を見てウスツキはとても嬉しそうにした。
「痛いかぁ？　そうか痛いのか。ならもっと痛くしてやろう」
楽しそうに尋ねるとウスツキは刀で鬼の左の腕も切り落とした。
「グウウゥゥッ！！」
今度は悲鳴は一人、鬼だけだった。そしてすっと鬼は消えた。少年はあまりの痛みに気絶してしまっていた。
「チッ、起きろよ。おい！」

倒れ込んだ少年の背中を強化されたウスツキが蹴飛ばした。
ボキッ！
何かが折れた様なにぶい音がした。
「あ！！　……やっぱー。……死んだかな？　おーい」
ウスツキは恐る恐る少年を足先で突いた。
「すんだかい？」
暗闇から痩せた青年が現れた。
「あっ！　誠治。すまん、コイツ死んだかも」
痩せた青年、誠治にウスツキは軽く頭を下げた。
「えっ！　ちょっ、困るよ。この前も半殺しにしてたじゃないか。怒られるのも愚痴られるのも僕なんだよ！　彼等はこの国ではあくまで病人扱いなんだから」
誠治は慌てて倒れた少年を見た。
「こりゃ酷い。背骨が完全に砕けてる。何とか生きてるが、このままではすぐに死ぬぞ」
誠治は慌てて携帯を取り出しどこかにかけた。その光景を見ながらウスツキはこれからの課長の愚痴をどうかわすかを考えた。

解説、鬼とウスツキ（前書き）

先生と三石さんによる解説

解説、鬼とウスツキ

三石
「先生、ここでは妖怪知識やなんか解りにくい事、無駄知識をグダグダと話していこうと思います」
先生
「うむ」
三石
「先生、では早速質問です」
先生
「何かな？」
三石
「先生の本名って何ですか？」
先生
「それは秘密だ」
三石
「え～何でですか？」
先生
「簡単な事、その方がカッコイイからだ。謎の美青年。ああ、カッコイイなぁ俺って」
三石
「…せ、先生ってこんなキャラでしたっけ」
先生
「ふむ、人間の約八十パーセントは軽度、重度はあるがナルシストだ。ナルシストこそが人としての主流だ」
三石
「そうですか。まあ冗談はその位にして、妖怪解説お願いします。今回は鬼ですね」
先生

「鬼、日本では最もポピュラーな妖怪だな。憑かれ人の三分の一は鬼だという位、種類が多く知名度も高い。三石君は鬼についてどの位詳しい？」
三石
「鬼ですか。……そうですね。一般的に鬼はまず角があって、体の色は赤、青、黄色で大柄でトゲ付き金棒を持っていて、後は……虎のパンツって所ですかね」
先生
「うん、その通り。後は牙が生えていたり神通力が使えたり色々とバリエーションが多いから省くとして基本は、やっぱり角。何故鬼は角が生えてるか知っているかい？」
三石
「う～ん……人間との違いを解りやすくする為ですか」
先生
「違う。鬼は本来は中国の都の鬼門からきている。鬼門は開かずの門、だからその事を聞いた昔の日本人はそこに何か恐ろしい魔物がいるのでは無いか考えた。ま、つまりは鬼門にいる魔物だから鬼という訳だ」
三石
「なるほど。でも角が生えてる理由とは余り関係無いじゃないですか」
先生
「察しが悪いな、鬼門とは干支で言えば牛と虎」
三石
「あっ、解りました。つまり角は牛から牙とパンツは虎から来ているんですね」
先生
「その通り。後牙もね……まだまだ鬼について語る事は多いが今回はこの辺りで終りだ。次はウスツキだ」
三石

「先生、私はウスツキなんて妖怪、初めて聞きました。実際の所何なんですか？」
先生
「ん～、言ってだろう座敷童子だ。まあ、所謂地方の呼び方だ。正式にはウスツキコと呼ばれる」
三石
「なるほど」
先生
「座敷童子は有名かつ、鬼に比べ遥かに新しい。それほど語る事は無いからこの辺にしとくか」
三石
「もう終わりですか。鬼に比べるとやけに短いですね」
先生
「仕方が無いだろ。私もあんまり知らない。それに余りにマニアックな事言っても詰まらんだろ。最後に無駄知識……テレビのチャンネルあるだろ、各局毎の間にある砂嵐あれは各局の電波が混ざらないようにする為だ……また今度はもうちょっとましなの考えとこう」

第二話　ミカドと愉快な仲間達　前編

某所、廃ビル
　暗闇の中、窓から月明かりに照らされてかろうじて室内の一部が見える。
　室内は傷だらけの古びた大きな机と綿のはみ出た椅子以外はコンクリート片やガラスの破片等ゴミ位しか無くがらんとしていた。
　その机に座り一人の赤髪の男がガラスの無い窓から空を見ていた。
「星か……そういえば星は人を導いてくれるそうだ。お前等はその事についてどう思う？　馬鹿げているか？　その通りだと思うか？」
　赤髪の男が振り向かずに背後の月明かりの届かない暗闇に話し掛けた。
「はぁ？　突然なに？　それは？　風水的な意味合いを持つやつ？　それともどっか漫画か小説の受け売り？」
　暗闇から少し子供っぽく呆れた声が返ってきた。
「後者だ。俺は風水や占いを信じて無いし、よく知らん。で、どうなんだ？」
　赤髪の男が再び尋ねた。
「僕から？　僕にとって星はあくまで星だよ。空に浮かぶ小さな光で、まあ街灯の小さいやつみたいな感覚かな。有っても無くても困らない。あぁ、太陽と地球が無くなれば少し困るかな。あれも一応星だからね」
　声には余り興味は無さそうだ。
「そうか。……じゃあ、お前は？」
　赤髪の男は星を見ながら続けた。
「次は俺だな。星は人を導くのでは無い。星とは人が自ら目指す物だ。星、それは天に存在する。すなわち頂点の存在という事だ。男として、いや……男女差別は駄目だな。……そう！　人として生

まれたからには頂点を目指すのは当たり前じゃないか」
先程の声とは違うよく通る声が答えた。
どうやら暗闇の中には複数の人がいるようだった。
「そうか。じゃあ、お前は？」
赤髪の男は頷き次を促した。
「ちょっ、ちょっとちょっと、それなんか変だよ！　斎藤さんが言ってるのは所謂スター的な意味合いを持つ物で今はお天道様の星の事で話ているんじゃ無いの？」
戸惑った声で最初に答えた声がそれを遮った。
「そんな事、誰が言った？　俺は星について思う事を言えと言っただけだ」
「うーん、まあそうか。分かったよ」
少し不満が有ったものの、どうでもいい事なのでどうでもいいか、と無理矢理納得した様な声だった。
「じゃ、次」
「……私ですか？」
少し高めの女性の声だった。
「お前でも望月でも好きな方でいい」
「私は……そうですね。……星、星……星ですか……星はいいですね。美しく心が洗われる様です。星は芸術です。自然の芸術です。でも人を導くのはちょっと無理ですかね。以上です」
先程の声が悩みながらも答えた。
「星は美しい……か」
赤髪の男は呟いた。
「安直だね。夏目さんは。個性が無いよ。ありきたりで全然面白くないなぁ」
最初に答えた幼い声が文句を言った。
「そ、そんな。で、でもみんな思うでしょ。星はは綺麗だって」
心外だと言わんばかりの声で女が尋ねた。
「思わん」

「別に」
「その通り」
女性の反論に赤髪の男、子供っぽい声、二番の声…斎藤さん、という順番で答えられた。
「私を含め二対二ですね。望月さんに決めて貰いましょう」
そう答えると暗闇で何かがゴソゴソ動く音がした。
ガッ
「イタッ」
何かに当たる音が聞こえ悲鳴が上がった。
「大丈夫？　夏目さん」
子供っぽい声が心配気に尋ねた。
「あ、大丈夫です。アラタさん。躓いただけで、転んでませんから」
どうやら女…夏目が暗闇の中のガレキに躓いた様だった。
「望月さん、望月さん。起きて下さいよ」
何かを揺する音と共に夏目の声が聞こえた。
「……何だよ。……」
機嫌が悪そうな声が聞こえた。
「望月さん望月さん、星は綺麗ですよね！？　芸術ですよね！？」
「はぁ？　……はぁ、う～ん星が綺麗ね～。まあ綺麗じゃない。光ってるし。質問それだけ？　眠いからもういい？」
最初のはぁは訳が解らなく『何言ってんのコイツ？』いう声で次のはぁは疲れた溜息だった。
「あっ、もういいです。ありがとうございました」
するとまた望月の声が聞こえなくなった。
「ほらっほらっ！　やっぱり星は綺麗じゃないですか！」
夏目が嬉しそうに言った。
「う～ん。そうだね、でも多数意見が常に正しいとは限らないよ。昔は、地動説は大数を占める天動説に潰された。今じゃ地動説が主流、常識なのにね」
アラタの言い訳に夏目が食いつき口論になった。

「そんな事ありませんよ。アラタさんのは詭弁です。地動説とかは、あくまでも肯否の二択です。しかし物の美しさは人によって違います千差万別なのです」
「物の美しさも二択でしょ。美しいか美しくないかのね」
「それは違います。美しいさにはいろいろ種類があります。例えば花の美しさと素晴らしい絵画、その二つはどちらもとても美しい物です。しかし、その美しさは別物です」
「何が違うんだい？　美しい花の絵と美しい花、そこからえられる感情は同じ物さ。それに……」
「……」

50分経過

まだ口論は続いていた。斎藤は暗闇に火を点し漫画を読み、ミカドは二人の口論を静かに聴き入っていた。
「つまり星は美しいんですよ！」
「美しいの定義は何？　人に感動を与える物？　それとも別の何か？　夏目ちゃんの意見は曖昧だよ。曖昧」
「ですからそ
「そこまで！」
そこで初めてミカドが口を挟んだ。
「何だよ、ミカド」
「何です、ミカドさん」
アラタと夏目は不満げにミカドを見た。
「何時まで話すつもりだ？　それに」
ミカドは顎で下を指した。
「ああ、誰か来たね。……特災かな？　夜光かな？　四凶では無いと思うけど」
アラタは夏目に尋ねた。
「黒いコートにゴーグルのお決まりの格好。まぁ多分特災ですね。

今は一階を探索してます」
「よーし俺が行って片付けて来ようか？」
斎藤は読み掛けの漫画を閉じて立ち上がった。
「…そうだな、斎藤、任せた。適当に追っ払って来てくれ」
「おう！」
「ああ、斎藤さんが行ったら侵入者、悲惨だね」
「斎藤さん、乱暴ですからね」
斎藤が出ていった後アラタと夏目は溜息をはいた。
……

第三話　ウスツキ反省会

特殊災害対策事務所
一室にて
　学校の教室位の部屋の真ん中に長机と四脚の椅子があった。片面に三脚あり一番右に変な男…数本の赤いラインを引いて掌に小さなアンテナ……いわゆるパラボラアンテナを付けた正に変な男としか言いようの無い男が座っていた。服装が普通の背広なだけに余計に奇異に写る。
　そして真ん中は、ニヤニヤし少年がいた。どこにでもいそうな、少しチャラチャラした服を着ていたが右のおかしな男に比べればごく普通の少年だった。
　そして一番左はウスツキだった。
　三人は黙っていた。変な男はピクリともせず。少年は頬に手をついて、そしてウスツキは物静かに背筋を伸ばし目をつぶっていた。
　しばらくして一人の男が部屋に入ってきた。
　ボサボサの髪に髭面、まるで休日のおっさんみたいな男だった。
「ウィース、ちったぁ反省したか？　馬鹿どもぉ」
　男の声に誰も答えない。男はため息を吐きながら三人の向かいの席に座った。
「ドッコラセット。おーい、口付いてんですか？　えぇ？」
　おっさんが三人の顔を見る。
「ん？」
　よく見ると目をつぶったままのウスツキの体がうっすら揺れている。
「クゥ……クゥ……」
　……小さくかわいらしい寝息が聞こえる。
「寝るなー起きろー」
　男は怒気を含みながらも落ち着いた声でウスツキのほっぺたをペ

チペチ叩きながら話し掛けた。
「あ、あぁ、課長、おはようございます。ふぁー最近寝不足でして……ちょっと、セクハラですよ。止めてください」
ウスツキは頬を叩いていた手を結構な力でバチンッと弾いた。
「はっはっは、お前は反省室に入れられても偉そうだな、おい」
課長はにこやかに笑いウスツキの頭を撫でた、がすぐに弾かれ課長はまた、悲しそうなため息を吐いた。
「まあいい、さぁて、お前等、なんで呼ばれたかわかるか？」
気を取り直し神妙な空気で話し掛ける。
変な男は答えない、少年はそっぽを向いている。仕方がないのでウスツキが答えた。
「何か問題を起こしたんでしょうか？」
すると課長はニコリと笑った。
「そーだ、そーだ、お前等は馬鹿だから何故呼ばれたか、わからないと思っていたが安心したぞ」
「あーーーー！　来たぁ！　脳内電波がきたぁ」
突然変な男が叫んだ。
「うおぉ！？　な、なんだ、何が来たんだ？」
すぐに課長が慌てながらも聞いた。すると落ち着いた声で
「課長。また奥さんと喧嘩しましたんですか。しかも原因は子供の成績。そんな事で私に当たら無いでくださいよ。あ、あと一応言っときますけど私は仕事を理由に奥さんに責任をすべて押し付けるより貴方も少しは何か考えるべき物があると思いますが」
「だーぁぁぁあ！　まれぇい！　お前にゃ関係ないだろ。あいつと不仲でお前に迷惑かけたか？　ん？！　関係無いだろ！　なら黙ってろ！」
課長は早口でまくし立てた。
変な男の名はクダンといい、有名な人頭牛体の予言妖怪からとっている。能力もそのまま予言。
しかし、何時、何処で誰がなんぞは自分で決められず本人は電波

といい不規則な予言をする。近くの人間の過去は故意に見ることが出来てプライバシーを侵害しまくるので組織で二番目の嫌われ者。等級は第五種。
小さな方はカゲバミ。少しマイナーだが影を食う妖怪。力は影に入れる事。自分だけでなく。あらゆる物の影に入り影の続くままに移動が出来る。夜の闇に紛れたらもう無敵。等級は第二種。
第五種とか第二種とかは強さのランク、正式には第二種規模特殊災害という。
長いので縮めて第何種と呼ばれる。
組織の名前からあるように憑かれ人による被害は基本的に災害として扱われている。
そして第一から第十三まであり数が減るほど大規模災害……つまり強くなる。今では多数の憑かれ人が存在するが第一種の憑かれ人は現在、特災で確認されているだけで十七人しかいない。ちなみにウスツキも第一種。一応最強の憑かれ人だ。ウスツキの力はかけ算で道具さえあれば理論上無限の力が出せると言われている。
つまり憑かれ人は強くなるほど珍しく特災としてはウスツキやカゲバミを失う訳にはいかない。何故なら特災には敵対者がいるから。新しく生まれた憑かれ人はもちろんの事だが組織だって抵抗する憑かれ人の団体が二つ存在する、夜光と四凶だ。
憑かれ人は基本的に迫害される存在。
昔はこの特災に憑かれ人はいなかったし重武装した局員で事足りていた。
しかし憑かれ人が増えると一人の強い憑かれ人が現れた。
その憑かれ人は自らを夜光と名乗り。自分の元に憑かれ人を保護し始めた。そしてどんどん大きくなり特災も迂闊に手出し出来なくなった。そして夜光は憑かれ人の国を創ると言いだし各地でテロ行動に出た。しかし、これをよしとしない連中も夜光の中にいた。そして彼等は夜光と敵対し分離した。それが四凶である。
四凶は夜光の中では元は三番目に高い地位だった。夜光とナンバ

ーツーのカグツチが裏切り者を倒すべく四凶に戦いを挑むものの敗北。夜光は四凶に四人掛かりで襲われ死亡。カグツチは足止めされ動けず、夜光が敗北を知りやむを得ず撤退。これが初めての憑かれ人同士の大規模戦闘であった。

この時を特災は好期とみ殲滅すべきと動き出したがこれまでの戦いの為戦力不足か深刻だった。そこで一部の憑かれ人に安全の変わりに自らの下で働くように呼びかけた。国の下で働く事に安心感を覚える者も多くそれなりの数は集まった。

……その後結果として三つの組織は争い。強力な憑かれ人を多くを失ったが決着はつかなかった。

そのため強力な憑かれ人は貴重で少しのやり過ぎは許されていた。

「まあまあ、課長落ち着いて下さいよ。今日は何するんです？　事務仕事？　反省文？　まるで学校みたいですね」

ウスツキはなだめるように課長を馬鹿にした。

「ウスツキとクダンは事務、カゲバミは反省文だ」

「なんで俺だけ反省文なんだ？」

課長の決定にカゲバミが質問した。

「お前は事務に使えないからだ」

「そーかい」

するとカゲバミは猛烈な速さで用意されたペンを走らせ反省文を書き始めた。

「ちっ、よーしお前等はこっちこい。」

スラスラと反省文を書くカゲバミを見てわざわざ聞こえる様に舌打ちしてから課長はウスツキ、クダンを連れ歩きだした。

第四話　ミカドと愉快な仲間達　中編

廃ビル一階
暗闇の中を四つ影が音もなく侵入した。そして探索を始めた。正面フロアはカウンターと待合席がありまるで病院の様だった。
カツーン…カツーン
足音が聞こえた瞬間、四つの影はビクッとしたがすぐに落ち着きを取り戻し音がする方…階段があるであろう廊下の死角に素早く音も無く隠れた。
カツーン
階段を降り終えた。四人からは階段を降りて来た者が全く見えない。
一つの影が鏡を使い確認しようと腰のポーチを探ろうとした時
「いるんだろ。そこと、そこと、そこと、あとはそこ」
降りて来た者は声から相手は男とわかった。四つの影は男がどこを指したか判らなかったが相手は四ヶ所を指し示した。男は相手が四人だということが判っている。恐らくは場所も、四人は覚悟を決めた。
「動くな！　我々は警察だ。このビルのオーナーから相談を受け調査に来た。君達が最近この辺りを騒がしている不良か？　大人しくしなさい！　大人しくしたら厳重注意だけで今日の所は帰してあげよう！」
四人は姿を見せず警察を装い油断を誘った。ここには憑かれ人かいると十中八九は確定していたが万が一の為の意味も込めていた。しかし
「嘘こいてんじゃねえよ。日本にそんなゴキブリみたい格好した警察がいるかよ。特災だろが。嘘つくなよ公務員」
階段から降りてきた男…斎藤が言った。
「我々の事を知っているとは、やはりお前達は憑かれ人だな！　大

人しくしろ！」
四人は死角から飛び出し斎藤を半円の形で囲った。四人とも同じゴーグルにコートを着ていた。
「あーあ、はぁ、小物か。俺が出るまでもなかった様だな」
斎藤は相手をぐるっと見渡し頭を掻きながらつまらなそうに言った。
「何を！」
「おい、落ち着け。つまらん挑発にのるな」
右端の大柄な男が憤慨し前に進もうとしたがリーダーらしき男に止められた。
そして四人と一人はどちらも黙ったまま睨み合い動かなくなった。いや、動けなくなった。
「ん？」
「今だ！！」
斎藤がよそ見をした瞬間、四人は一斉に憑き物を出した。赤鬼、青鬼が二人、烏天狗一人そして金属の板を張り合わせた細長い物、まるで機械の蛇のようなが一匹現れて斎藤に襲い掛かった。
「おお、何あれ、メタルドラゴンか？　あんなのいたっけ？」
斎藤が目を丸くして嬉しそうにに言った。
シャッ
斎藤が鉄蛇に気を取られると烏天狗が葉っぱで出来た団扇…ヤスデを振るった。
スッ……パクッ
すると風に当たった斎藤の右腕が大きく裂け、血がダラダラと流れ出始めた。切り傷はかなり深く赤い血の間に白い骨が少し見えていた。
「うぉっと！　いってー。油断したな」
そう言いながら斎藤は何でもない様に傷口に手をあてた。
ボッ！
傷口がいきなり手の下で燃えた。そして傷口から手をどけるとあ

れだけ深かった傷口が完全に無くなっていた。
四人に動揺が走った。
「再生系能力持ちか！　巻き付け！　捕獲するぞ」
リーダーらしき男が指示すると鉄の蛇が斎藤に巻き付いた。鉄蛇は頭から尻尾まで八、七メートル位あり太さは半径二十センチメートル以上はある。そしてその鋼鉄の体で斎藤を拘束した。
「よしっ！　確保おぉ！」
蛇に巻き付けられ身動きが取れない斎藤を鬼やら天狗やらが素早き押さえ付けた。
黒コートの一人が安堵のため息をはいた。
「やりましたね班長」
右から二番目の小柄な黒コートが話し掛けた。
「こいつが油断してたからな、まぁ何とか上手くいったよ。しかしまだ油断するなよ。こいつ一人とは限ら無いからな」
リーダーは緊張を解かぬまま周りに注意しながら斎藤に尋ねた。
「おい、ここにはお前の他に後何人憑かれ人がいる」
しかし、斎藤は余裕の顔で笑った。
「ハハッ、これで勝ったつもりかよ」
「何？」
リーダーが困惑した顔になった。
今、斎藤は身動きが出来ない。そして例え自分の憑き物を出そうとしても宿主である斎藤本人を押さえられている以上例え再生能力が有ろうとどうしようも無い筈だ。
「はっ！　まさか」
リーダーは何かに気が付いた。
「分かったか？」
斎藤は不敵に笑った。
「お前は偽物だな！　捕まったと見せ掛け油断した所を不意打ちをするつもりだな」
リーダーは焦った様に周りを見渡した。

「はぁ？　ちげぇよ。お前のだろ？　この蛇。よく見ろよ。ココ」
ゴポンッ……ゴポッ
「なっ！？　」
いつの間にか蛇が赤く熱されて泡立ち熔けかけている。
鬼や天狗も蛇ごしに押さえ付けていたが余りの熱かに思わず手を離した。
「ハーハッハッハァ！　不死鳥の如く復活！」
どろどろにけた鉄蛇の融解金属を腕で払い斎藤は無傷で立ち上がった。斎藤の体の周りに炎が舞っている。
「俺は斎藤、斎藤康介！　不死鳥の憑かれ人、人呼んでフェニックス斎藤！！」
炎を背にやたらにカッコイイポーズをビシィッ！！　と決めた。
「チッ、化け物が！　近付くな！　距離をとって戦え！　鋼弾！」
鉄蛇が鞭の様にしなる。
ヒュゴッ！
鉄蛇の尾から拳大の鉄塊が撃ち出された。
ドゴッ！
音速を超えんばかりの速さで撃ち出された鉄塊は斎藤の腹をたやすく貫通し後ろの壁をめり込みようやく止まった。
「よしっ！　やったか？」
局員達は注意深く斎藤を確認する。斎藤は腹に大穴を開けられ仰向けにぶっ倒れている。だが
ボッ！
斎藤の腹が燃え始めた。
「チッ、まだだ！　鋼弾！　鋼弾！　鋼弾！」
鉄塊がまた撃ち込まれる。斎藤の頭、肩、左足を吹き飛ばす。だが火は消えずに少しずつ強く拡がっている。あまりの炎に斎藤の姿が見えなくなる。
「まずい、グヒン。風だ！　炎を散らせ！」
部下の烏天狗の憑かれ人の指示を出す。そして烏天狗は団扇を扱

い素早く風を起こし炎を散らそうとするが炎の勢いが強すぎて消えない。
「消えるかよ。そんなそよ風で俺の炎が」
斎藤完全復活。傷一つ無い斎藤が炎の中から現れた。
「くぅ、我々だけでは倒し切れんか。ジリ損になってはつまらん、ここは一時退却か。引くぞ皆、散開」
リーダーは戦力比較をし一時退却を決定した。そして四人はばらばらの方向に素早く逃げ始めた。
「おおっと、逃がすかよぉ！」
斎藤は腕を振るった。
「オラァ！」
斎藤の腕から炎がボールの様に投げられた。
轟音！
高密度に圧縮された火球が一番最後の局員の背中に直撃した瞬間、轟音と共に爆発した。直撃した奴はもちろん周りの局員も衝撃で吹き飛ばされた。
「荒木ィ！」
吹き飛ばされた局員の男が直撃した局員の本名を思わず呼んだ。
「ほっとけ！　今は自分の事だけ考えろ！」
リーダーが叫ぶ。
「クソがぁ！」
「逃がすか、ボケェ！」
斎藤か追い掛ける。天狗の遠距離攻撃で足止めしようとしても無駄だった。
切り裂いても切り裂いてもすぐに回復してしまう斎藤にはこれッぽっちの足止めにもならなかった。
「焦らず、迅速に退却しろ！」
リーダーの怒声が廃ビルの中で響き渡った。

第四話　ミカドと愉快な仲間達　中編（後書き）

次は多分月曜日には

第五話　オオグチ初登場

夜の街を一人の男がフラフラと歩いている。周りには誰もおらず遠くで犬の遠吠えが聞こえた。
「よお、まだ生きてのか」
「ミカド、か」
背後に突然、現れた影に男は振り向かずに答えた。
「久しぶりだな。オオグチ、五年ぶり…だったか」
男、オオグチはここで初めて後ろを見た。
「ミカド、腹が減った。なんか喰わせろ」
「昔の友人に会った第一声がそれか。まあいい。これでいいか？」
ミカドは少し呆れながらもポケットから数個の飴を出した。
「足りん。肉をくれ。肉」
差し出された飴を受け取りバリバリ食べながらさらに手を出した。
「ふむ」
ミカドは腕を組み周りを見渡し何かを見つけ首をクイッと動かした。
「キャイン！」
壁の隙間で丸まって寝ていた野良の中型犬が何かよく分からない黒い靄に掴まれミカドの方に投げられた。
「よっと」
ミカドは犬の首を掴み取り片手の人差し指と中指を器用に使い首をゴキリとを折った。犬はくたっとし時折痙攣していた。
「ほい」
出来立てホヤホヤの犬の死体をミカドはオオグチに渡した。普通の人からすれば嫌がらせにしか見えない。
「ふむ」
オオグチは満足気に受け取った犬の右前足をグリグリとねじりちぎり取り、生のまま噛り付いた。
「がぶっ、ブチュ、ぴちゃ、ガリ」

オオグチは口を真っ赤にして犬の足を食べた。そして、一分も起たないうちに骨まで食べ終えた。
「……けぷっ……」
オオグチは残りの犬の死肉を掴み自分の影にほおり投げた。
ガプッ
犬の肉が地面に着く瞬間オオグチの影から巨大な口が現れそれを一飲みにした。その口は鱗に包まれた芋虫に鰐の口を付け足した様な姿をした化け物だった。
「ペッ、まだ足りんな」
猫みたいに毛玉を吐き出した。
「それはもういい。今は我慢しろ。それより…だ。何故蘇った？」
ミカドはオオグチに尋ねた。
「何がだ？　……ああ、伽藍からか？　ふんっ、俺は伽藍には成らん。絶対にな」
オオグチはニヤリと笑った。
「ふーん」
ミカドは自分から聞いておきながらあまり興味は無さそうで話したくないならまあいいかという感じだった。
「で、お前はこれからどうするんだ？」
ミカドが聞いた。
「……お前には関係無いだろ。答える必要があるか？」
オオグチは素っ気ない。
「犬、あげただろ。それに俺はお前のダチだろ」
「……まあいいか、どうせたいしたことない、とりあえずはウスツキを食す」
オオグチは笑いながら答えた。
「ウスツキを喰う？　何故？　お前に限って復讐…では無いだろ」
ミカドは興味深そうに聞いた。
「何故？　だと、何故そんな事を聞く？　聞くまでもないだろ」
オオグチはやれやれと溜息をはき、一言言った。

「美味しいそうだからだ」
「何故ウスツキを？　いつも思っているが人肉はまずいぞ。味ならスーパーの牛の方が遥かに旨い。人の好む味に品種改良されているからな」
　ミカドの質問に対しオオグチは嬉しそうに答えた。
「味はどうでもいい、要は生きた肉だ。血も滴る生きた肉が欲しい。確かに死んだ肉でも腹を満たす事はできる。だがそれだけだ。そんな物に興味はこれっぽっちも無い。そして最も効率よく生きた肉を喰う為なら、人肉が良かっただけだ。街に沢山いるし弱くて大きい。勘違いするなよ俺は別に人を喰いたい人食趣味の変態などではない。もっと純粋に生きた肉を喰いたいんだ。生きた肉なら人だろうが犬だろうが猫だろうが鳥だろうがトカゲだろうが魚だろうが蛙だろうが蟻だろうが毛虫だろうがゴキブリだろうがミジンコだろうがなんでもいいんだ」
　オオグチは興奮して早口にまくし立てた。
「そうか。流石にゴキブリは無いだろうがまあいい。じゃあ、お前は特災と戦うのか」
　ミカドの質問にオオグチは素早く落ち着きを取り戻した。
「そうだな、特災か。今、局員は何人位いる？」
　オオグチは五年間、伽藍（仮）だった為ジェネレーションギャップが激しい。
「だいたい千から五百の間位だな」
「おおざっぱだな。だが今はそんなにいるのか。前は百人もいなかったのにな」
　オオグチはあまりの多さに関心している。
「憑かれ人の数も年々、増えている。今、日本に約一万人は憑かれ人がいるって言われてる」
「一万！　一万人もいるのかよ」
「一万と言っても伽藍も合わせてだ。それに日本人は一億人以上いる、そこから言うと、1パーにも満たん。たいした数ではない」

「ま、そうか。そうゆう考え方も有るか。で、もう用事は無いか？」
オオグチは腹が減った為話を切り上げた。
「オオグチ、特災を」
「わぁーてる、潰すな、だろ。ウスツキ喰ったら暫くは大人しくするよ。人も喰わない。また山に篭って獣でも喰ってるよ」
「……ならいい」
「あ、そうだ。夜光はどうした？」
オオグチはふともう一人の昔の友人について聞いた。
「知らないのか、夜光なら四凶にぶっ殺された。四人でなぶり殺されたらしい」
「はぁっ！？　夜光が死んだのか？　マジでか？」
「本当だ。六年前にな。馬鹿な事仕出かしたからな、俺が四凶を唆した」
「お前が唆したぁ！？　てめ、俺等三羽烏は不戦だろ。お前、俺、夜光の三人で決めた事だ！」
オオグチは驚きっぱなしだった。
「俺は直接関わってはいない。それに四凶ごとき負けるのが悪い。お前はその時、行方不明だったからな相談しようが無かった。何だ？　何か文句でもが有るのか？」
「……よく考えたら別に無いな。あいつが死のうが別に俺には何の問題無いか。だがウスツキを喰ったら即、山篭もりのつもりだったがやめだ」
驚きに固まっていた顔が緩み、オオグチは三日月みたいな口をしてとても嬉しそうに笑った。
「何をする？」
「四凶を喰う。四人共全員なぁ！」
大声で宣言した。
「そうか、まあそうするよな。なら忠告だ」
「なんだぁ？」
「お前は強い。憑かれ人最強の一人と言ってもいい。だがそれはあ

くまでも一対一で戦った場合なら、の話だ」
「俺等のレベルじゃ関係無いだろ」
憑かれ人の強い者は団体戦が殆ど出来ない。癖が強すぎてすぐに同士討ちしてしまうのだ。
「侮るなよ四凶は夜光を倒した。一人一人の力量ならお前や俺に遠く及ばない。だがあいつ等四人のコンビネーションは驚異だ。一人ずつ片付けろよ」
「嫌だね。つまらない事言うなよ。夜光と俺を同格と見るか？」
夜光、オオグチ、ミカドはかつて三羽烏と呼ばれあまりにも強すぎる憑かれ人として一応同格とされていたが夜光は遠距離型、オオグチは近距離型、ミカドは万能型だった。いわば魔法使い、戦士、勇者の関係だった。魔法使いと戦士が一対一で戦えばまず間違い無く戦士が勝つ。つまり夜光は前衛がいて始めて真価を発揮する。
「接近戦で夜光一人が負けたからといって俺が負けると思うか？」
ミカドは呆れた様に肩をすくめた。
「違う違う、四凶は四人いる為手数が多く敵の弱点をつくのに長けていると言いたい。お前にもあるだろ、弱点」
だがオオグチは余裕の顔を崩さない。
「無いな。俺には弱点なんぞ。話はこれまでだ、そろそろ失せろ。じゃないとお前でも喰うぞ」
オオグチはミカドに軽く威嚇した。
「そうか、じゃあな」
「おう」
ミカドは己の影に吸い込まれる様にして消えた。
「ま、ウスツキにしても四凶にしてもまずは腹ごしらえだ。喰うぞ〜」
オオグチの影からノヅチがウゾウゾとはい出てきた。オオグチが歩くたびにさらに次から次へとウゾウゾウゾと出て来る。
「腹が減ったぁ！　それでは皆さん両手を合わせて！」
百を超え、千を超えんばかりの数のノヅチがオオグチを先頭に夜

の町を闊歩する。
「いただきます！！」

生ゴミを漁る野犬が、ソファーで丸くなっている飼い猫が、夜に同僚と酒を飲んでいる中年が、部活の大会に向けてランニングをしている青年が、家で布団に入り眠っている少女が、夜遅くまで起きてゲームをしている少年が、ノヅチは老若男女一切合切みな関係なく襲い掛かり、皆食い殺していく。
　そして僅か一夜のうちに一つの町の人間三万人弱全て、いや人間だけではない生き物全てがいなくなった。たった一人オオグチを残して。

第六話　ミカドと愉快な仲間達　後編

「あーやれやれ二人逃がしたか。ま、ばらばらに逃げられたら、仕方なねえか」
焼け焦げた部屋で斎藤は一人ため息を吐き肩をコキリと鳴らし階段に戻った。
……
「わりー逃がしたわ」
部屋に入るなり斎藤がミカドに謝る。
「別に良い。あいつ等が来た時点ここは捨てるつもりだったからな」
ミカドは無表情に言った。
「ところでよ、話変わるんだけど、見た目が鉄でできた龍か蛇みたいな妖怪っていたっけ？　なかなかかっこよかったんだが」
斎藤がミカドに尋ねた。
「……ふむ、蛇の妖怪は意外に多いからな……知らんな。多分何かの亜種じゃないか」
ミカドは考え込んでから答えた。
「うーん、まあ、多分そうだろうね」
アラタも同意した。
「望月はどうだ？」
斎藤はいつもの如く眠っていた望月を起こした。
「鉄の蛇？　鉄の蛇か。う～ん。金属が集まって出来た蛇ならもしかしたらカタナヘビかもな」
望月が答えた。
「カタナヘビ？　なんだそりゃ？」
「カタナヘビとかヨロイヘビとかそんな感じで呼ばれていてな、昔の戦場後に現れてな、死んだ武者の鎧や刀が集まった化け物だ。……なんて言うんだろ。こう、もしゃもしゃってな感じでな」
望月はジェスチャーで細長い蛇みたいな物を表した。

「えーと、つまるところに刀や鎧が集まって蛇の形になった妖怪って事か。……でも俺があったのって鉄板を張り合わせた感じだったぜ」
「鉄板？　ああ、そりゃ亜種だからだろ。蛇って言ってるがただ細長い姿をしているだけだ。正確には戦場で死んだ者の怨念が集まり塊を成した者で蛇とは余り関係ないとも言われてる。まあこんな物か……もういいか？」
望月は眠そうに答えた。
「あ、ああ、すまんな。もういいぞ」
斎藤が答えたると望月はすぐに夢の世界に旅だった。
「ああ、わりぃな話を戻してくれ。移動だったな。次のたまり場はどこにする？」
「そうだな……」
「ねえミカド、そろそろ隠れるのきついよ。めんどくさいし、この辺の特災……そろそろ掃う？」
突然アラタがとんでもない事を言い出した。
「え、ちょっ、無理ですよ！　私達はミカド、四天王メンバー除いたら八人しかいないじゃないですか！　特災は少なくとも憑かれ人が四百はいますよ。下手に動いてマークされたら厄介な事になりますよ」
夏目が常識的な意見をのべた。しかしミカドは違うところが気になり、
「下はもう八人か。何か良い通り名はないか？」
「はい！　ミカド、八輝星（はっきせい）なんてどう？」
アラタがノリ良く答えた。
「ふむ」
「いや、八人のサムライだろ」
負けずに斎藤も言った。
「ちょっと、今は特災のこ
「えーそりゃパクりが過ぎるじゃない」

夏目の異義を完全無視し話を続ける。
「四天王だって一応パクりだろうが！」
「みんなが使っているから良いの。それに強い四人組はやっぱり四天王だよ……あっそうだ八騎士なんてどう？　騎士もサムライも似た様な物でしょ」
「いや、結構違うぞ。例えば、騎士道精神は」
「まあまあまあ、今は名前を決めなくちゃいけないからその話はまたね。んー、他にはなんとか八人集とかどう。例えばミカド八人集とかさ」
「鬼夜叉八鬼集はどうだ」
「それは、どこの鬼だよ？　それとも忍者？　そりゃ鬼の憑かれ人はいるけどさ。でも一人だけじゃない。しかも八人の中で一番弱いし」
「あー！　ひっでーな、お前。八人は一応は同格で強い弱いは無いのに」
「事実だからしょうがないよ。そうだ八傑集は？」
「だからそれはパクりだろ。これなんてどうだ。面倒だし俺等合わして十二天王とか？」
「強さに段差があり過ぎるよ」
うだうだ……あーだ、こーだ……そりゃまずいだろ……いっその事……
三時間後
「決まらないな」
ミカドがぽつりと呟いた。空が既に明るくなってきた。
「だって斎藤さん、僕の意見の反対ばっかするんだもん」
アラタが不満を上げる。
「お前だって俺の意見反対してるじゃないか！　お互い様だ」
斎藤がすかさずに反論する。三時間もずっとこんな感じであった。
「まあまあ二人共落ち着いて下さい。では、こうしましょう。二人の意見を八人に持っていき八人で多数決で決めましょう。自分達の

名前ですから自分達で決めれば良いんです」
二人の喧噪から逃れながらも痺れを切らした夏目が妥協案を出した。
「四対四ならどうする？　お前が決めるのか？」
ミカドが要らない事を聞いた。四天王で一番立場が低いのは夏目だった。なので夏目は上二人に要らない恨みを買いたく無かった。
「えーと、それなら望月さんに決めて貰いましょう。望月さん、博識だし」
なので寝ている望月に全て責任を押し付けた。
「ふむ、なるほどな。二人共それでいいな？」
ミカドは一度頷き二人に聞いた。
「……まあ、それなら」
「いいぜ。まあ、勝つのは俺だろがな」
二人は同意した。
「ではそろそろ。解散！」
ミカドの一声で変人魔人達の集会が終わりを告げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0762h/

黄昏れ時より紅き赤

2010年10月17日03時03分発行